

かかげたものなどさまざまである。構成薬物名によつたものの多い「古方」に比較すれば、昌益の薬方名は「後世方」的ではあるが、きわめて独創的なものである。

昌益の薬方における生薬の数は、『万病回春』に比べて少ない。『万病回春』の生薬数は十種以上のものが多いが、

昌益の生薬数は九種（八味＋甘草）のものが非常に多い。

「八氣互性」の「八」という数によつて生薬数を制限したものと解される。四、五種の生薬を中心とする「古方」の薬方よりは多く、「後世方」的薬方であるといえるが、昌益は「古説」（『万病回春』）に対して、独自の薬方を構築したと解釈すべきである。

昌益の薬方の現代的有効性については、今後、臨床家によつて検証されることを期待したい。

昌益の医学論の立場については、すでに述べておいた（拙論「安藤昌益の医論と『古方』の解釈をめぐって」『安藤昌益研究会会報』第七号、一九八〇年十月）が、基本的に『内経』『本草綱目』『万病回春』などの「古説」批判によつて、真営道医学を形成し、体系的に展開したものとといえる。

（医学書院）

吉益東洞・南涯・北洲、三代の

門人録

—「奥田本」について—

矢 数 道 明

一
大著『京都の医学史』編集委員会では、資料として吉益家門人録を捜し需めてきたが、適当なものが見当たらず、載録できなかつたという。先頃その編集委員の一人、杉立義一氏より、もし吉益家門人録と名づけられたものがあれば公表して欲しいと、北里東医研の医史文献研究室を通じて希望が寄せられてきた。

『京都の医学史・資料篇』の中の「医家門人帳」を担当された杉立氏は、伊良子・山脇・荻野・賀川・小森家などの門人帳を詳しく報告されているが、吉益門人帳についての記載はないようである。

また、呉秀三編『東洞全集』にも、東洞の家族や門人の

代表者は挙げられているが、門人録としての記録はないようである。

二

演者の蔵書目録の中に、吉益東洞・南涯・北洲の、吉益三代にわたる門人録がある。その出所は、演者と同県人、常陸下館市近郊の奥田嘉門氏の旧蔵にかかるもので、安西安周氏の手を経て演者の書庫に収められた。この門人録の形式は、門人の出身地別に列記され、抜粋録と明記し、後半の南涯・北洲の部は東日本のみで西日本を欠く不完全本である。この門人録には、東洞五五〇、南涯三一九、北洲一一三の門人が地域別に記載されているに過ぎない。以下これを「奥田本」と称することにす。

さらにもう一つの吉益門人録がある。これは吉益南涯・北洲・復軒三代の門人録で、『漢洋医学闘争史』の著者、深川辰堂氏が当時木村濟世塾にあったと思われる吉益門人録を整理せんとしたもので、入門年月順に記載されている。深川氏自筆の写本である。以下これを「深川本」と称することにす。ちなみに深川本の南涯門人数は、安永二年（一七七三）より文化三年（一八〇六）まで、八七六の門

人が受付けられている。

三

昭和四十六年十一月二十七日、演者は上野日本学士院会議室で催された日本医史学会例会で「奥田本」を紹介したことがあるが、詳しい記録としなかった。

この「奥田本」は、東洞の直門、岑少翁の門人磯野弘道に師事した茨城県真壁郡河内村奥田（現下館市）奥田鳳作（一八一―一八四九）が「天保癸卯七月廿日、洛東華頂山下袋街、弄月亭にて之を写す」と注書し、「常陽後学奥田鳳作」と認め、さらに「此書は実に吉益家の秘蔵なり、固より他見を許さざるなり」と付記している。奥田鳳作の自筆写本と思われる。

奥田鳳作は、東洞を崇敬すること尾台榕堂に劣らず、その腹診術は最も優れ、東洞流腹診の著書五部に達しているが、常陸の僻村に居住し、三十九歳の若さで他界したため、その名が顕れなかった。

鳳作の四代後の嘉門氏は、明治三十八年生まれ、昭和医専卒、戦時中演者と同じく七十六兵站病院勤務の僚友で、母堂は小説『土』の作者長塚節の妹である。

四

奥田本は、安西安周氏が昭和四十四年四月四日に亡くなられて三ヵ月ほど経た頃、ご長男が父親の机辺に残された最も身近かな古医書を一括して演者の許に持参された中から発見されたものである。

安西氏は『日本医事新報』に、昭和三十七年三月三日発行より九回にわたって「医人文人あれこれ」を執筆し、「奥田鳳作と奥田月城」「夏目漱石と奥田月城」などを連載していたとき、奥田嘉門氏を訪問して、この東洞門人録を入手されたものと思われる。

奥田本の「江州」のところ最後の一行に「中神右内、号琴溪」の記録がある。琴溪は六角重任の『古方便覧』を読んで感激し、それより東洞に傾倒、独学にて古方を修得したとされているが、東洞門人録に記載があるのを見ると、東洞の晩年、琴溪二十八歳の頃にもかく入門の手続きをとったものと思われる。鳳作もそのことを補注している。

五

以上、吉益家門人録としての「奥田本」および「深川本」はともに完本ではないが、本会においては吉益家三代

の門人録「奥田本」についての概略を報告する。また、南涯・北洲・復軒の三代門人録「深川本」については来たる第三十九回日本東洋医学会総会にその大綱を発表し、両書の比較、門人の全記録などは改めて紙上発表することにした。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所)